

2022年度

千葉明德中学校入学試験 適性検査型入試

(2022年1月21日)

適性検査ⅢA・ⅢB

(本校会場)

解答・解説

《目次》

I	適性検査Ⅲ A (解答・解説)	……	1
II	適性検査Ⅲ B (解答・解説)	……	1 1

2022年度 適性検査型入試ⅢA型 解答・解説

〈解答〉

- 1 (1) 74100 円
(2) 44460000 円
(3) B 27900 円 C 20000 円
(4) B
(5) 19950000 円
(6) I 333 II 5972000000

- 2 (1) 左
(2) 95
(3) 35
(4) 60
(5) 4.9
(6) A 低 B ④ C ①

D 酸素分圧が 40mmHg の組織から 20mmHg の組織に移動するとき、表 1 を見ると X では 4% の酸素が、Y では 18% の酸素が細胞に渡される。一方、ヒトは 45% の酸素を細胞に渡すことができる。このことより、酸素をたくさんの細胞に渡せるようにヒトのヘモグロビンの特徴は X や Y のようなものにはならない。

〈解説〉

1 (1)

路線価が 78000 円で、奥行が 30 m なので、奥行価格補正率は表 1 から 0.95 である。

$$78000 \times 0.95 = 74100$$

よって 1 m²あたりの価格は 74100 円

(2)

土地①の面積は

$$20 \times 30 = 600 \text{ m}^2 \text{ であるから、}$$

(1) より

$$74100 \times 600 = 44460000$$

よって 土地①の価格は 44460000 円

(3)

道路 B について 1 m²あたりの価格を考えると、奥行が 35 m なので、奥行価格補正率は 0.93 である。路線価が 30000 円なので、

$$30000 \times 0.93 = 27900$$

よって 道路 B について 1 m^2 あたりの価格は 27900 円

道路 C についても同様に、奥行価格補正率は 1.00 であるから、

$$20000 \times 1.00 = 20000$$

よって 道路 C について 1 m^2 あたりの価格は 20000 円

(4)

1 m^2 あたりの価格の高い方が正面路線になる（4 ページ 3～4 行目）ので、
(3) より B

(5)

土地②は角地であるから、側方路線影響^{えいきょう}加算率を使って、 1 m^2 あたりの価格は

$$27900 + 20000 \times 0.03 = 28500$$

土地②の面積は

$$35 \times 20 = 700$$

よって $28500 \times 700 = 19950000$

土地②の価格は 19950000 円

(6)

I

土地③は台形になっているので、土地③の面積は

$$(200 + 300) \times 400 \div 2 = 100000$$

$$100000 \div 300 = 333.333 \dots$$

小数第 1 位で四捨五入するので、333 m

II

道路 D の奥行価格補正率は、I より 0.80 である。 1 m^2 あたりの価格は

$$73000 \times 0.80 = 58400$$

道路 E について、奥行価格補正率を決めるための計算は

$$100000 \div 400 = 250$$

よって 奥行価格補正率は 250 m を参考に表 1 から 0.80 と決まる。
道路 E の 1 m²あたりの価格は

$$55000 \times 0.80 = 44000$$

よって 正面路線は道路 D ということになる。
つまり、土地③は角地なので、1 m²あたりの価格は

$$58400 + 44000 \times 0.03 = 59720$$

したがって

$$59720 \times 100000 = 5972000000$$

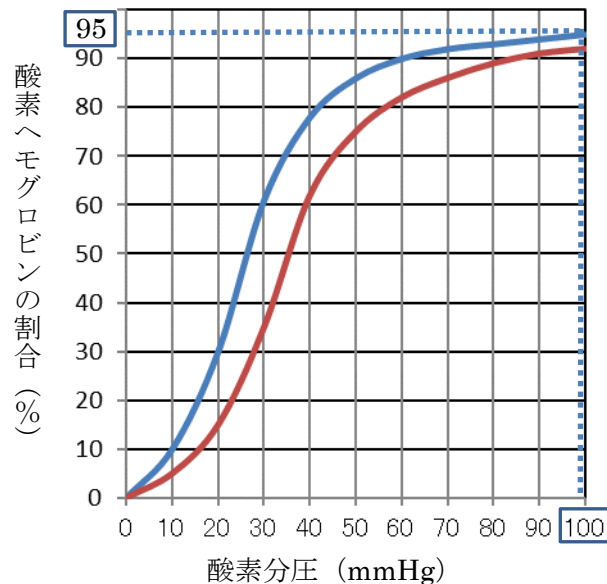
土地③の価格は 5972000000 円

2 (1)

図 2 を見ると二酸化炭素分圧が 40mmHg の曲線は左側、二酸化炭素分圧が 60mmHg の曲線は右側となっている。よって、答えは「左」となる。

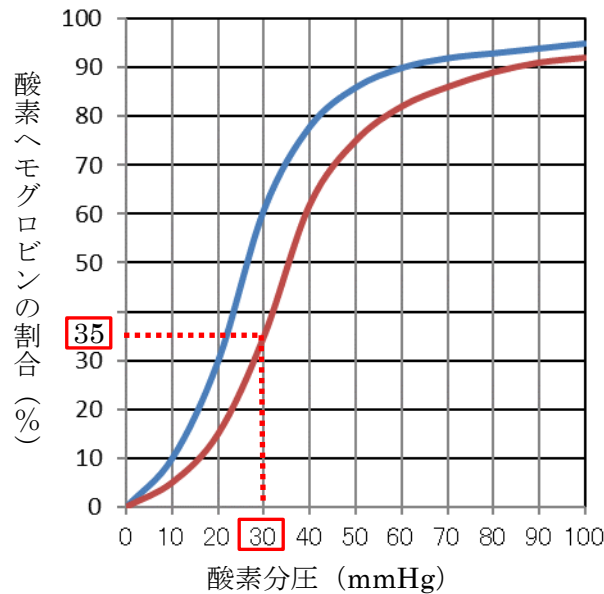
(2)

図 2 の左側の曲線（二酸化炭素分圧 40mmHg）で酸素分圧 100mmHg の値は、以下の図のとおり 95%であることがわかる。



(3)

図2の右側の曲線（二酸化炭素分圧 60mmHg）で酸素分圧 30mmHg の値は、以下の図のとおり 35%であることがわかる。



(4)

酸素を離したヘモグロビンの割合は、肺胞での酸素ヘモグロビンの 95%から末端組織での酸素ヘモグロビンの 35%を引いた 60%となる。

(5)

70mL の血液が心臓から 70 回送り出されたので、全身に送り出された血液量は $70\text{mL} \times 70 = 4900\text{mL}$ と求められる。解答欄では単位が「L」なので、単位を合わせる。1L が 1000mL より、4900mL は 4.9L となる。

(6) A

生命活動をしている末端組織では酸素を消費するので酸素分圧は低くなっている。

(6) B

胎児が酸素分圧の低い胎盤で母親の血液から酸素を受け取るためには、低い酸素濃度下において胎児のヘモグロビンは母親のヘモグロビンから酸素を受け取る必要がある。すなわち、低い酸素濃度下で胎児のヘモグロビンは母親のヘモグロビンよりも酸素との結合力が強くなければならない。

①・③は高い酸素濃度下の条件を述べているので適切ではない。

⑤は高い二酸化炭素濃度下（すなわち低い酸素濃度下）では胎児のヘモグロビンは母親のヘモグロビンよりも酸素との結合力が強い必要があるので適切ではない。

②は低い酸素濃度下で胎児のヘモグロビンが母親の酸素ヘモグロビンよりも酸素との結合力が弱いと書かれているので適切ではない。

したがって④が正解となる。

(6) C

母親の血液は、胎盤に入るときの酸素分圧が 40mmHg であり、胎盤中の酸素分圧が 20mmHg になると文章中に書かれている。すなわち、胎盤では酸素分圧が 40mmHg から 20mmHg に変化するとき、母親のヘモグロビンから胎児のヘモグロビンへ酸素が渡される①が正解となる。

(6) D

ヘモグロビンが酸素分圧 40mmHg の組織から酸素分圧 20mmHg の組織に移動するとき、酸素の何%が渡されるのかを X・ヒト・Y で比較すればよい。表 1 より、X の場合は 4%、ヒトの場合は 45%、Y の場合は 18%だとわかる。この事実より、より多くの酸素を組織に渡すことができるのはヒトであることを述べればよい。

㊦ Micheline Mason, Jackie Dearden 著、豊高明枝訳『インクルーシブ教育の輝ける実例から』

本書は、イギリス・ロンドンにあるインクルーシブ（包括的）な学校（ダビドー幼年学校）の様子について記述したものである。インクルーシブをめざす学校は、実際の現場ではどのような様子なのかを、具体的な事例を紹介しながら述べている。

本文の引用箇所は、「友情がいちばん大切……」の一部である。ここではナターシヤが、クラスメイトで脳性マヒのウィリアムに対してどのように接しているのかを述べている。

(1) ナターシヤが、障害のあるウィリアムとの学校生活で学んだことは、第2段落で述べている。

(2) ㊦の聞き取りと、文章㊦・㊦では、次のことが読み取れる。

- ・聞き取り㊦―実現される共生社会のあり方。
- ・文章㊦―共生社会で受け入れられる人にどのように寄り添うか。
- ・文章㊦―共生社会で受け入れる人の気持ち。

以上のことを読み取り、作文する問題である。

〈解説〉

㊦ 島信一朗著『インクルージョン…インクルージョン時代の幕開け！ 共にに未来を切り拓こう！！』

本書では、インクルージョンはどのように実現すべきかについて、筆者の考え方を述べている。本文の引用箇所は、「第5章 インクルージョン2020」の一部である。筆者は、オリンピックとパラリンピックのマラソンは同日開催とすべきであると主張している。

(1) ブラインドランナーの心情を聞き取る問題である。

(2) パラリンピックランナーとオリンピックランナーがいつしよに走ることによって何が実現できるのかを聞き取る問題である。

㊧ 木村泰子・高山恵子著『「みんなの学校」から社会を変える』

本書は、障害のある子もない子と同じ場で学び合う、大阪市立大空小学校の校長先生 木村泰子さんと、長年、発達障害のある人の支援と教育活動に取り組んでいる高山 恵子さんとの対談を記述している。

本文の引用箇所は、「第1章 子どもを育てる土台を築く」の一部である。ここでは、障害のある子もない子も安心して生活を送るためには、どのようにすべきかについて述べている。

(1) 傍線部Ⅰ「安全基地」が子どもに与える二つの影響は、その次の高山さんの発言で説明している。

(2) 傍線部Ⅱ「チーム力で育てろ！」とは、この直後の木村さんと高山さんの発言の中で説明している。

そのためには、障害のある人たちを受け入れる側の態度が問われることになるでしょう。「受け入れる」というのは、社会保障を整備するというだけでなく、私たちひとりひとりが心を開いて接するように努めることが大事なことだと思います。そのことで、障害を持つ人たちの精神的な意味での安心感もひろがっていくだろうと思います。

こうして、受け入れられる人も受け入れる人も、心を開いて接するようになれば、社会全体も変化していくように思います。まわりにいる人たちの間で、おたがいが気安く助けを求められるような社会を実現していくことこそが、共生社会の最も理想的なあり方ではないかと思います。そんな社会を実現するには、私たちひとりひとりの心がけが大事だと思います。

〈解答〉

㊦ (1) 一人ではない

(2) 人間力の限りない可能性

㊧ (1) 安心感を得ることと、安心と外界の好奇心とのサイクルを担うこと。

(2) 家庭だけでなく、子どもにとっての特定の大人が安全基地となること。

㊨ (1) 私たちはお互いに必要としあっていて、互いに与え合うことができる贈り物をみんなが持っているということ。

(2) 現代社会において、心や身体に障害を持つ人たちが日常生活

(例) の場面でさまざまな困難に直面しているであろうことは、容易に想像することができます。例えば、社会制度の不備や人々のへん見などによる困難が考えられますが、共生社会では、障害を持つ人たちが不安や危険を感じるときにこそ、たよることができる人や場所が存在することが大事なことだと思えます。その意味で、障害を持つ人たちが安心を得られる社会を築いていかなければならないと思えます。

ージョンの世界そのものです。

それぞれが己おのれの限界と直面するとき、自分だけの力ではなく、自分以外の誰かだれの存在があるからがんばれます。

一人だけであれば諦めてしまうような苦しいときでも、**一人ではない**から諦めずに走り続けることができます。ときに刺激を受け合いながら、ときに勇気を与え合いながら、ときに励まし合いながら…。

同じ目標に向かって挑戦する同士たち、互いがんばる姿の存在があるから、応援してくれる人々の声があるから、いつも以上の力が生まれてきます。

そして、自分のためだけでなく大切な誰かのために一歩踏み出して新しい世界を切り開いていく姿は、まさにインクルージョンの成せる業、**多様性の調和**によって切り開かれていく人間力の創出そのものなのです。

ブラインドランナーは、風を切って走ることの喜びを噛みしめながら走ります。

自らの限界に直面して苦しいとき、隣にはガイドランナー（伴走者）の存在があります。

そこに言葉は不用です。心で通い合い、対等な存在として一つとなれたとき、二倍以上のパワーが生み出されてきます。

沿道から声援をおくる人々は、その二つの輝きから勇氣というありきたりの言葉では決して表現しきれない、**人間力の限らない可能性**までも感じさせてもらえるのです。

（島信一朗『インクルージョン…インクルージョン時代の幕開け！ 共にに未来を切り拓こう！！』）

(聞き取り ㊦)

次に読む文章は、島信一郎さんの『インクルージョン』という書物の一部です。

島さんは、障害者と健常者がひとり一人の「違い」を輝かせながら、インクルージョン、つまり共に生活をする社会をさらに進めるべきだと主張します。

以下は、パラリンピックとオリンピックのマラソンについての部分です。視覚障害者であるブラインドランナーが、オリンピックのマラソンランナーと共に走ることがどれほど素晴らしいことかを述べています。

パラリンピックの視覚障害者マラソンは、オリンピックのマラソンと同じ42・195キロの同じコースを走ります。しかし、何故わざわざ別の日程で行われるのでしょうか？ 同じ日に行われていないことを不思議に思うことは、いたって自然なことではないでしょうか。車いすマラソンも然りです。

安全性の問題や運営上の問題であれば、柔軟にスタート時刻を10分程度前後させることだけでクリアされてしまうだけの話です。

選手の気持ちはもちろん、沿道で声援を送る人たちの気持ちになっても、同じ日に一緒に走る姿を応援することができたならば、その感動の味わいたるや、あえて説明するまでもないほどでしょう。

現に全国各地域で開催されているマラソン大会では、ブラインドランナーも同じスタートラインに立って、同じゴールを目指して走ります。色々なランナーたちが区別なく混ざり合いながら、同じ目標に向かって走る姿は、まさにインクル